

テーマ「改正カリキュラムに伴う協同学習のとりくみ」

カテゴリー：③教育方法（授業・演習）

1 学校概要：学校名：華頂看護専門学校 所在地：滋賀県大萱7丁目7-2 課程名：3年課程

1 学年定員数：30名 就業年限：3年

2 内容：

本校は開校から10年を経て、異学年の交流を通じて学ぶヒドゥンカリキュラムを展開していた。つまり、上級生が下級生をコーチングする看護技術演習や、各領域の看護学の演習発表会、実習報告会などである。下級生にとっては身近な接近目標となり、演習参加後のリフレクションペーパーには、ほとんどの学生が上級生への敬意と尊敬の念を記載し、自らの目標を重ねていた。また、上級生の発表会聴講後は、自分が今すべき学習を疎かにせず取り組むと決意を新たにしている下級生も多かった。主体的な学習の動機づけにおいて接近目標の示し方として極めて効果的であり、この学び合いの機会を意図的に設定してきた。今回のカリキュラム改正に伴い1年次と2年次に「協同学習」の授業科目とし、学び合いの機会を時間割に組み込んだ。その内容と実施状況について報告する。

《看護技術演習》

レイヴとウエンガーが提唱する「正統的周辺参加」で上級生が下級生を看護技術指導する形式を継続している。4月のベッドメイキング指導は、基本動作や正確性のみならず協調性も学び下級生の主体的な学びにつながっている。また、放課後には自主的にゼミ単位でバイタルサイン測定や日常生活援助の技術も、関係性が積極的な練習につながっている。

《各看護学の看護過程発表会、実習報告会の聴講》

この発表会は必ず3つのステップで展開する。

- I 準備性：必ず前もって資料を読みこむ時間を各学年の時間割で確保している。学生はその時間を活用し、質問事項を明確にして発表会に臨んでいる。本校での看護過程の履修は1年次後期と位置づけている。そのため、1年生には事例紹介や看護過程の考え方、見方などを教員が指導したうえで、質問事項を検討するように指導している。また、上級生は自らリハーサルを繰り返し、質疑応答の準備をして臨んでいる。当日までに教員も1回はリハーサルに参加し、質の向上の為、アドバイスをおこなう。
- II 発表会：発表会の運営はすべて学生が実施している。上級生一人ひとりとは毅然とした態度で、全員が制限時間内に発表している。下級生も食い入るように上級生の発表を聴講している。質疑応答では、全学年から質問がある。1年生も上級生が質問する様子を見て、自己紹介してから質問するスタイルを模倣している。また、教員は、発表者に対する質問のみならず、上級生や下級生への発問も折りまぜ、発表会に協同参加して自覚を促している。臨地実習での経験などを織り交ぜて回答する上級生もおり、さまざまな看護の視点や気づきが共有される機会となっている。
- III リフレクション：3つの視点「看護過程（資料）」「プレゼンテーション」「発表会の運営」で学びを記載させている。看護過程では、解剖生理や病態理解の重要性、具体的な看護計画立案の必要性を学んでいた。「同じ疾患の患者でも看護は異なり、個別性に合わせた援助をするのが看護だと理解できた」と多くの1年生が記載していた。上級生のプレゼンテーションは、実習報告会における臨地実習指導者の評価も高い。そのため、話すスピードなどの態度面、質疑応答でも速やかに対応する点に尊敬の記載が多い。また、看護技術も含む発表会では、特に1年生は臨地実習の経験がなくイメージがつきにくい。そのため、3年生がおこなう患者へのロールプレイングは「アイコンタクトがとれている」「傾聴できている」「看護師のようだ」というプラスのコメントが多い。一方、中間の学年である2年生の発表会では「質疑応答が合っていなかった」などのマイナスのコメントも散見し、実際の発表内容との妥当性も見られる。さらに、発表会の運営では司会が円滑に会の進行を進めるなどそれぞれの役割を適切に果たす必要性を学んでいた。

《実習報告会の発表》

1年生は6月に地域・在宅看護論実習Ⅰを終え、その学びを各自が2,500字以上の論文にまとめた。初めての発表会となるため、上級生から発表会の運営方法について指導を受けた。また、発表時のパワーポイントのスタイルや図表の使い方などについても、ゼミ単位で直接指導を受けながら作成した。そのため、例年よりも早くパワーポイントが作成でき、発表原稿の完成に至った。

